手先の動きと子どもの感情⑮

写真(1)

清水エミ子

前回は、物的環境を活動中に示した時の指先の表われを観察したが、その観察で、動的（動きまわっている時）の指先の表われが、喜び、楽しさを表わしていることに気づかされた。そこで今回も、もう少し動的活動の場の指先の表われを見つめてみた。

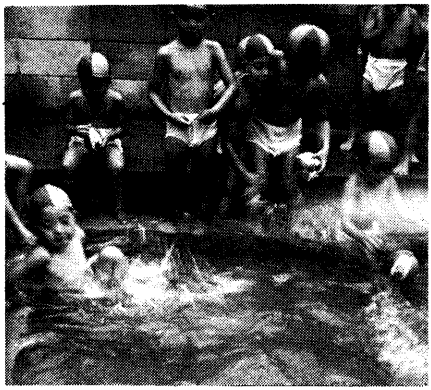
例①

プールの中で、一生懸命泳いだりもぐったりして動いている時のとしひこの指先、手先

ことしは天候にめぐまれ、連日プールあそびをすることができた。そのおかげで、初めは顔に水がかかっただけでプールサイドににげてきていたとしひこは、水の中にもぐって泳ぐこともできるようにまでなった。

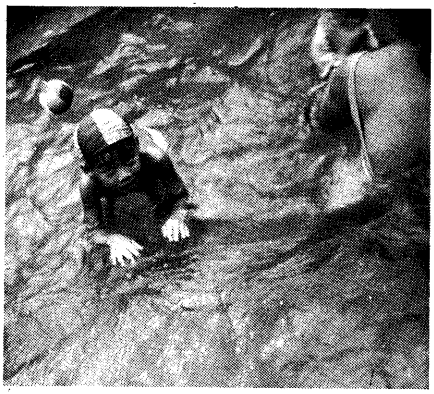
顔に水がつこうが、水泳帽がとれそうになろうが、水から少しでもからだを出すのがおしいように、水の中をもぐって泳ぎまわるようになった。

ひょろっと、よろけただけでも、ブクッと沈んでしまう。水の中では、どんなに不安なく楽しんでいるとはいえ、子どもたちのからだは、緊張して動いている。そんな状態でも、水になじんでしまい、水の中で全く喜びを味わっているとしひこたちの指は、全くゆるやかに水をにぎっている。



写真(4)

写真(2)



写真(5)

写真(3)

しかし、顔やからだには緊張があるが、手先、指先は、空にちかい水をいじっている。地上で物をいじり、あそぶと同じような動きで、ゆっくり水面を左右して楽しんでいる。（写真(1)～(5)）

こんな表われも、私が、楽しみ動いている時（積極的に）の指先、手先の表われに気づいていなかったなら、見のがしていたことだと思う。昨年の水泳の時の記録も、水に対する不安、緊張だけの表われのみを見つめていた。

これらの記録を比較してみると

●こわさ、不安、緊張の表われは、やはり静的場面での表われのみであったこと

●動きの中での喜びの表われは、顔やからだで表わせない喜び、楽しさを表わしている。相手にも、喜び、楽しさをわけ与えてくれるような、ゆたかな表われが伝わってくることがわかった。（水をつかみ、かきまわし、はじくなど、表現のしかたがゆたか

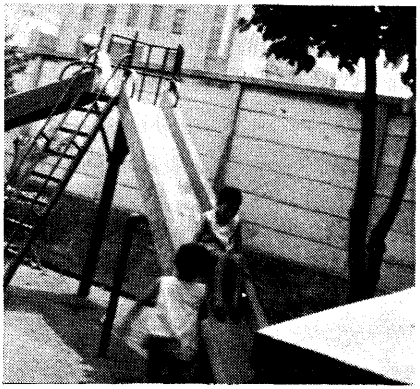
で、創造的であることがはっきりとわかった）

例②

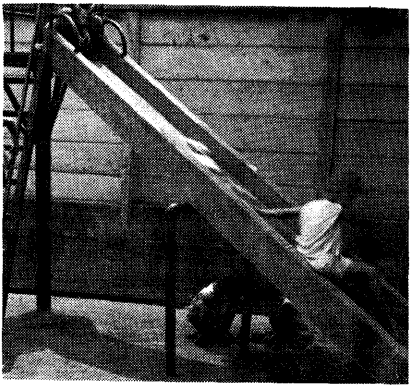
おすべりをすべりおりている時の指先、手先（写真(6)(7)(8)）

おすべりの階段をのぼっていく時の指は、てすりをしっかりとにぎって、緊張を表わしている。（顔は、友だちとしゃべったりふざけたりしているので緊張は表われていない）

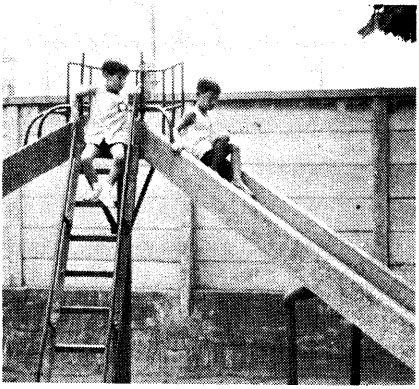
さて、すべろう、どうやってすべろうか、と考え、考えがまとまりすべりおりる時は、階段をのぼっていく時とは全く逆で、顔やからだはこわばってかたくなりやすいが、手先、指先は全くのんびり、からだのいろいろな所におかれている。



写真(6)



写真(7)



写真(8)

いくぞ、どけどけ、と顔はこわばっていても、手先は、どこまで先の方にすべりおりるかなどの期待を表わして、のんびりブラブラとしている。

おすべりでの積極的な遊びの手先、指先ほど、心の変化をすなおに表わす場はないと気づいた。すべりおりる時、ちょっとしたからだのバランスのくずれで、こわくなったり、思いがけないスピードを楽しんだり、と、すべり台一つで、いろいろと心の変化が起こり、手先、指先がピクン、ピクンとそのようすをしらせてくれる。

一番上で、これからすべりおりようとする時の指先は力がは

いり、一番緊張している時のようだ。すべりおり始めてしまえば、手先はらくに楽しみを表わしてくる。

しかしおすべりの場合、足だけは大半の子がいつも緊張しているようだ。(たまに、無鉄砲な子どもなどが、足もダラリと緊張をとき、しりもちをついたりしているようだが)

途中ですべるのをやめたり、おすべりの前をだれかが通ったりすると、足は一番緊張する。

おすべりのへりにつかまっている手先、指先も、目的をもって自分からのった時は、らくにのんびりとつかまっている。しかし積極的でなく、おすべりでもしようかと、ブラブラやってきた子どもの指先は、ぎこちなくへりをにぎっている。

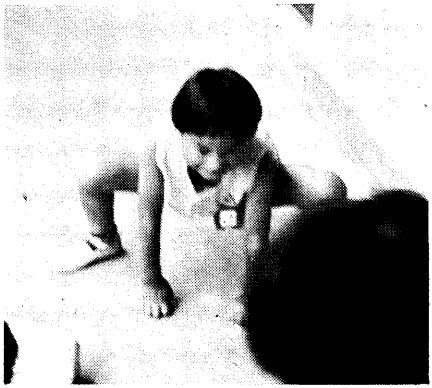
写真(9)

だから、友だちとおすべりであそんでいる子どもたちの指先と、ひとりぼっちでポツンとおすべりをしている子どもの指先は、全く違う表われをしている。すべり方は外見では同じように見えても、指先はちゃんと違いを伝えてくるのだ。

おすべりとにている表われを見ることのできる遊びに、低鉄棒がある。

鉄棒にぶらさがり、手をはなし、からだをブラブラさせられるようになった指先は、らくにダラリとたれさがっている。(写真(9))

おなかと足は緊張を表わしている。口では「先生がさかさに見える。あっ、あそこの足は、だれちゃんのですか?」などといっているうちに、手の指先がピクッと動いた。特に人さし指の動きが早く強かった。私が、あれっと思っていると、からだがグラッと動き、地面に両手をついて、鉄棒からピョンととびおりた。



写真(10)

この時のようすでもわかるように、自分が積極的に鉄棒に

写真(12)

写真(11)

ぶらさがった時の指先は、らくな表われをし、楽しんでいるが、鉄棒の近くをだれかが通ったりして、バランスをくずされたりすると、指先がまず、合図をするかのように表現し、それからからだ全体で行動をおこすというように、指先は心の信号係のような役割をしていると思われるのだ。

例③

おすもうごっこをしている時の手先、指先

まさるとただしは、ベランダで何やら楽しそうに話し合っていた。「すもうは、こうやって、こうなるんだね」というような話をしていたが、次に実演を始めた。

まさるが「ハッケヨイ」とかまえ、(写真⑩)「顔は前向きなんだよ」とただしに話しかけている。

この時のまさるの指は、ベランダの床に、にぎっておかれているが、不安や緊張の表われではなく、適当に力がはいっている。顔はただしに話がわかってもらいたいため、少しこわばり、緊張を感じているが、手はうでも含めて、おだやかな力のはいり方をしていたのだ。

つぎにただしと、「やろうか」「うん」の会話のあと、二人はベランダでくみつき合ってしまった。(写真(11)〜(14)

私は、足をかけ、たおしにかかった時、止めにはいろうと考え、くみついたようす、手先の表われを観察していた。

写真(12)のくみつき始めは、ふざけるようなようすが多く、からだ全体、手先全体でも中途半ぱな表われしかよみとれなかった。しかし写真(12)のころから、両者は真剣さを加え、全力で相手をおし出そうとし始めた。

相手のからだをしっかりつかまえている手先、指先に、私の全神経はすいつけられてしまった。指先、手先の表われをのが

写真(14)

写真(13)

すまいと、じっと見まもった。

全力で相手をおしているのだから、相手にくみついている手にも全力がはいるだろう、と思い、積極的に行動をしかけていった時の全力のはいった指先、手先の表われかたは、と見つめたのだ。

写真でもその一部がわかるように、力はいれられており、一種の緊張は表われている。しかし、不安や、自分を守るための緊張ではない。驚き、不安の時の力のはいり方の表われと、まったく違っているのだ。その変化のようすは、

●相手にグイグイおしまくられてゆく時は、相手の衣服がちぎれそうになるほど力を入れ、不安を表わした緊張になっている。

●相手をおしもどし、少しらくな状態にもどると、力ははいっているが、らくなおだやかな表われに変わってくる。(写真(13))

まさるの、こしと足は緊張しているが、指先、手先はらくに相手のうでにかけられ、五本の指も軽くそろって、ややすきまがあいていて、ゆとりさえつたわってくる。

指先の緊張の表われは、四本の指をきちんとつけている時と、五本がパッとひろげられて力がはいり緊張している時とある。

軽い、少しのひろがりは緊張ではなく、余裕、くつろぎの表われであることが、今までの例から知ることができた。

まさるとただしの指が、すもうという、少しの心のゆるみで相手におし出されてしまったりするきびしい活動にもかかわらず、そしてからだの一部分だけ活動するのでなく、全身を使わなくては遊べない活動であっても、その遊びが楽しく、快く活動している時は、指先は軽くそろい、ゆるやかな間隔をもって

活動していることが見られた。

まさるとただしのすもうを見ていて、私は、いつ倒れるか、ひっくりかえされるかというコンクリートのベランダでの危険な遊びなのに、からだ全体を見るより指先を見つめていた。指先がピクンとするのを間違いなくよみとって近より、助けの手を出す方が正しい指導に役立つと、つくづく感じさせられた。

からだ全体をバクゼンと見つめているからハラハラしたり、「こんな所でおすもうはだめよ」「おすもうはどこで、どうやってやる約束だったかな」など、禁止や、おどしの言葉かけをしなくてはならなくなるのだ。

「マットの上で、先生が見ている時しかおすもうはだめ」これでは子どもたちの創意や、自主性、問題解決の場は育たない。危険な活動で、事故があってはいけないが、場や、活動を子どもからとりあげてしまうのでなく、保育者が正しく見まもり、方向を示していくことを考えなくてはいけないのではないだろうか。

いつ、子どもたちが不安を感じ、バランスをくずし、危険を予期しているかを、保育者はあらゆる場で、ひと手先によみとることをしなくてはと、この二人のすもうというか、くみ合って活動しているようすと手先の動きを見て、つくづく感じさせられたのだ。

例④

友だちといっしょに、かけ回りながら活動している時の指先、手先

おとなや保育者から見れば、何の意味も価値もないようにみられる活動（行動）のなかに、ただかけ回る、というのが見られる。時々、子どもたちは園内を意味なく走り回り、キャーキャーいってたわむれている。その活動（行動）には目的らしいものは見つからない、ただ動き回っているということがよくある。（写真⑮）

写真⑮

六、七名でホールをかけ回っていたのだ。一人がキャーッといって右に走れば、ほかの子どもも全員、右に走っていく。つぎに、ほかの子どもがワーッとうしろ向きにかけ出せば、みなうしろを向いて走ってい

写真(16)

写真(17)

く。汗をかき、息をハアハアはずませて、右に左にかけ回るのを見ていると、動物の大移動のように感じる。

しかし、この走り回るという活動が、友だちと知り合い、許し合い、からだをぶつけ合って行動することの楽しさと喜びを知らせ、感じ味わわせるものであることを、いまさらのように見なおすことができた。

ワーッという声に、からだの向きをかえおくれた子どもが、うしろから来た友だちとぶつかって床にころぶ。力あまって前の子どもの足に、自分の足をからませて共にころがる。

こんなことのくり返しなのだが、六、七名の男児は、一人も泣かない。いたくした足やひざをちょっとのぞき、なぜまわし、すぐに友だちの群れに加わっていっている。ふつうならワーッと泣くはずのことがらがおきているのに泣かない、にやっとするだけで終わっている。なぜなのか、――私はこのひとかたまりのかけ回る子どもたちを見ていて、考えさせられた。

汗をかき、友だちにおくれまいと一生懸命だが、手先はだらりとからだの横にあり、ゆるやかな安定をつたえているのだ。うでも、手も、指も力ははいっていない。軽くまげられたひじで、かけるバランスをとっている。

友だちのからだが自分にぶつかって来そうになったり、ぶつかってしまった瞬間だけ、手足は力がはいり緊張して、それをよけようとする。

からだの横にらくにおかれ、かけるリズムに合わせ、左右にゆれる手先は、すもうの時の指先と同じにかるくそろい、ややすきまがあいている。かけ出している時の顔は、汗と緊張で一方に向かっているが、手は快く、喜び、楽しんでいることがわかる。手先だけが、ゆりかごにでものっているのではないかと

思われるぐらい、ゆったりした表われを伝えてくるのだ。

かけ回っているうちに一人がボールを見つけ、それをけり上げた。それをキッカケにサッカーのような遊びに発展した。

（写真⑯）

今度はボールという目的に向かってかけ出し始めた。この活動ではっきりよみとることができたのは、

●目的物に近づくと、手に力がはいってくる

●目的物、ボールをけろうとする時、手はぎゅっとにぎられたり、パッとひろげられたりして緊張を表わし、けってしまったあとは、またらくな指先、手先にもどる。

（にぎりこぶしでも、余裕のあるにぎり方をしている。しかし顔やからだは、ボールに向かって突進しようとする緊張と、人にとられまいとする、するどさが見られる）

以上のように、からだを動かしている時の手先、指先の表われを見ていると、

●動いている時でも、ただ動いているだけでは表われははっきりしていない。

●積極的に、目的に向かって動いている時には、手先、指先は快の表われをいちはやく表わし、つたえてくることがわかった。

●動いていても、人から動かされている時の指先、手先は消極的であるし、表われ方もにぶい。

●自分から進んで動いている時の指は、生き生きとその喜びをつたえてくれる。

もっともっと、いろいろの場での指先を見つめ、保育の中で正しくとらえ、積極的に指導していくようにしなければ、とつくづく感じるのだ。

（大田区立蒲田幼稚園）